発想の転換で新たな価値を創造

# とうきょ

64
2025.3.7発行

特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

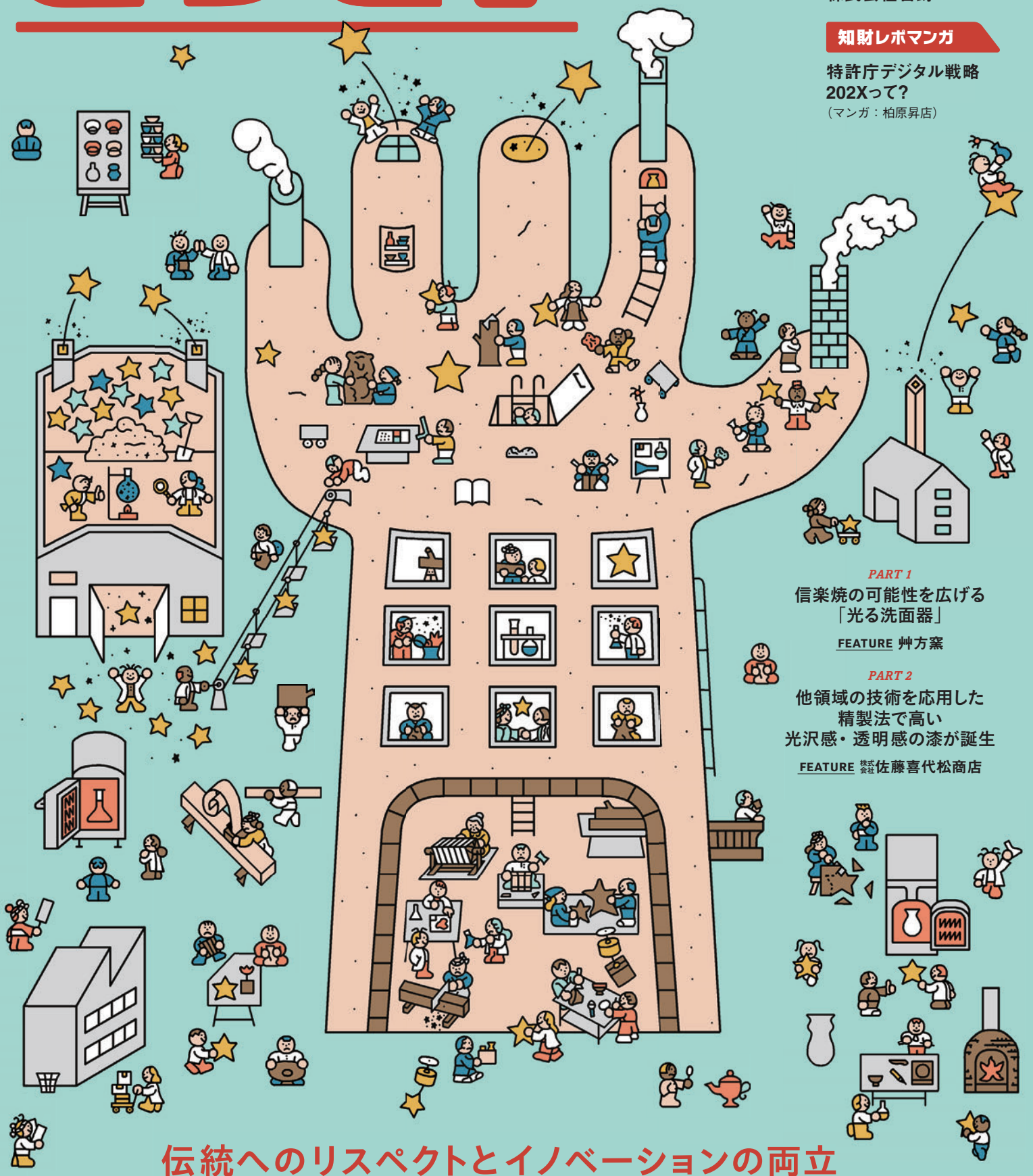
WEB版はコチラ

**知財戦略**

どうやって取り組んでいるの？
株式会社岩鋳

**知財レポマンガ**

特許庁デジタル戦略
202Xって？
（マンガ：柏原昇店）



*PART 1*
信楽焼の可能性を広げる
「光る洗面器」
FEATURE 艸方窯

*PART 2*
他領域の技術を応用した
精製法で高い
光沢感・透明感の漆が誕生
FEATURE 株式会社佐藤喜代松商店

伝統へのリスペクトとイノベーションの両立

# 知財活用で描く伝統産業の未来

特集

伝統へのリスペクトとイノベーションの両立

# 知財活用で描く伝統産業の未来

インバウンドの増加やサステナブルな社会を志向するトレンドを背景に日本文化の価値が再認識されるかたわら、伝統産業の衰退が社会課題となっている。知財を活用した、業界の枠を超える連携や仲間づくり、新規顧客の獲得などの事例の中に、新しい伝統産業の姿を探る。

「光を通す陶器」の特許技術で、信楽焼の可能性を拡張する試み

» P.4-5

漆のポテンシャルを引き出す特許技術で、業界の枠を超えた商品開発

» P.6-7

## 伝統産業の市場規模は長期的に縮小が続く

古くから受け継がれてきた技術や技法で、日本文化の芸術性を高めることや人びとの暮らしを支えることに貢献してきた伝統産業だが、その長期的な衰退が社会課題となって久しい。

伝統産業の中核となる、織物・染色品・漆器・陶磁器・鉄器・和紙・木工品などの「伝統的工芸品」※に関する統計データを見ると、1998年度から2017年度の20年間で、伝統的工芸品の生産額合計は約2784億円から約927億円へとおよそ3分の1に減少し、従事者の人数も、約11万4千人から約5万8千人へとほぼ半減している（P3グラフ参照）。また、高い技術と豊富な経験を持った職人の称号である伝統工芸士も、同20年間の推移は4229人から4060人へと漸減傾向で、職人の高齢化に伴い、その後の減少ペースは加速している。ただし女性の伝統工芸士は同時期に50％以上増加しており（430人→660人）、今後さらに活躍の場を広げることが期待されている。

## 特許技術や意匠・商標戦略で伝統産業に新しい可能性を

日本人のライフスタイルの変化など、伝統産業の市場が縮小している要因は複数ある。しかし時代とのミスマッチを嘆くのではなく、伝統産業が培ってきた技術や知識を生かしつつ、発想の転換や従来の枠を超える事業モデルの構築によって、新たな価値創造に挑戦する試みが強く求められる。

そして各地で起きている、伝統産業の世界に新しい風を吹き込む動きの中で、特許権や意匠権、商標権といった知財を活用した取組にもしばしば出合うことができる。今回の「とっきょ」64号では、誌面の全体を使って、❶新しい技術や発想の転換で、新機能や付加価値を創造する ❷他分野への技術転用や、領域横断的な活用 ❸ライセンス契約などの仕組みを活用 ❹ブランディングや、観光客誘致・移住促進などの地域資源化 ❺海外をはじめとする新市場の開拓　といった、知財が開く伝統産業の新しい未来を予感させる、さまざまな事例を紹介していく。

※伝統的工芸品：「主として日常生活の用に供される」「伝統的な技術又は技法により製造される」など5項目の定義を満たし、「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」に基づき経済産業大臣の指定を受けた工芸品。2024年10月17日時点で243品目が対象となっている

アイヌ文化の伝統的工芸品の地域団体商標取得で、ブランド力を強化

» P.11

生分解性プラスチックの最先端の特許技術と、会津塗の伝統との融合

» P.15

新機軸で海外進出に挑む南部鉄器や蒔絵アクセサリーを支えた商標戦略

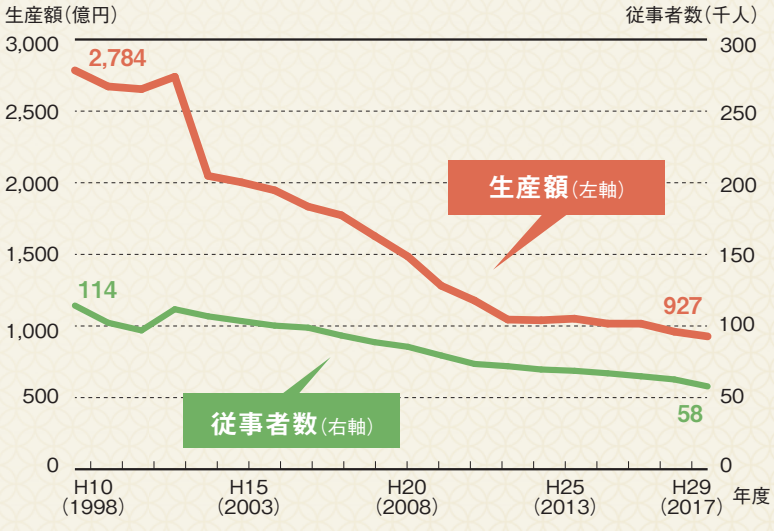
» P.8-9／P.16

## ── 伝統産業が直面する主な課題 ──

1. 需要の減少
2. 後継者の不足
3. 原材料・用具等の不足
4. 生活様式や価値観の多様化
5. 産業構造の変化

総務省の「伝統工芸の地域資源としての活用に関する実態調査」（令和4年）では、伝統工芸の産地が直面する主要な課題として「需要の減少」「後継者の不足」「原材料・用具等の不足」が挙げられている。これらは単独の課題ではなく、それぞれが関係し合っている（需要の減少によって、新たな就業者が伸び悩むといった負のスパイラル）。もちろん、より広範な背景としては、服装や日用品、ライフスタイルの洋風化、都市化の進行に伴う産業構造の変容など、日本社会が経験してきた大きな変化が存在する。

●伝統的工芸品の生産額・従事者数の推移




出典：一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会



画像提供：株式会社佐藤喜代松商店、株式会社岩鋳、二風谷アイヌクラフト事務局、株式会社三義漆器店、漆工芸大下香仙株式会社

特集 1

特許技術の透光性陶土を活用

# 信楽焼の可能性を広げる「光る洗面器」

**日本六古窯の1つで、現在も全国有数の窯業地である滋賀県甲賀市信楽町。特許技術を活用して開発された、常識を超えた焼き物が注目を集めている。信楽焼の可能性の拡張に挑み続ける窯元・艸方窯と、地域の窯元や作家のものづくりを長年支援してきた、滋賀県工業技術総合センター信楽窯業技術試験場に話を聞いた。**

## 特許技術「信楽透器」に出合い幾多の失敗を越えて製品開発

１９７５年に自分の窯を持って以来、信楽焼の新しい表現や技術を求めた取組を続けてきました。なかでも大きな成果に結実したのが、透ける陶器を実現した滋賀県の信楽窯業技術試験場の特許技術「信楽透器」で作った、「光る洗面器」です。

陶器は光を通す性質を持たないというのが常識。十五年以上前に、信楽透器を紹介した新聞記事を読んだ時は半信半疑でしたが、実際に信楽窯業技術試験場で見せてもらうと、従来の陶器の３倍の透光性で、肉厚な状態でも光を通します。しかも成形性が良く、他の陶土を練り込めるなど自由度も高い。創作意欲が刺激されて、すぐ滋賀県に技術使用の許諾を申請しました。その頃ＬＥＤの活用にも関心があったので、滋賀県立大学のプロダクトデザイナー、南政宏さんに「世の中に貢献できるものを作りたい」と、「光る洗面器」のコンセプトを伝えると、斬新なデザインを提案してくれました。

しかし開発は失敗の連続でした。約３年間持ち出しが続きましたが、お付き合いのあった大手陶器メーカ

光る陶器シリーズの最新作。「光と影をデザインする」アートの領域に進化している

艸方窯（そうほうがま）　代表

**奥田 芳久（おくだ よしひさ）さん**

画家として出発し、26歳の時に信楽の名家・奥田家に婿入りして陶芸の道に進む。1975年に「艸方窯」を創業し、絵付けや金箔を積極的に用いるなど信楽焼の新しい可能性を探り続ける。1999年信楽陶芸展審査委員特別賞受賞。

Collaboration

滋賀県工業技術総合センター信楽窯業技術試験場

# モノ・ヒト・コトづくり支援と知財を結び付けて地域の魅力発信を促進

1927年（昭和2年）、前身の模範工場の流れをくみ滋賀県立窯業試験場が開設されました。その後改称を経て、1997年（平成9年）に滋賀県工業技術総合センター信楽窯業技術試験場へと改編。長い歴史の中で、新素材や技術の開発による地域のモノづくり支援を柱に一貫して取り組んできました。「信楽透器」（特許第5352035号）もその1つで、2008年に当時の職員が、光ファイバーに用いる石英ガラスなどを原料に混ぜるアイデアを得て、光を通す陶器を開発したのが出発点です。

特許の実施許諾（ライセンス契約）においては、まずは滋賀県の産業振興を目指して県内の事業者の積極的な活用を促しつつ、県外にマッチングの幅を広げるに当たっても、「信楽透器」の商標を活用したブランディングを意識しています。艸方窯さんはご自身で土づくりのメソッドも開発されたケースですが、他にも、陶磁器用粘土の製造・販売事業者さん（実施許諾の対象）を通して土を購入し、信楽透器の製品を開発している窯元さんの事例も複数あります。今後、大きな焼き物に適している信楽焼の特徴を生かして建材に応用する例など、さらに製品のバリエーションが増えて、信楽の魅力発信につながることが期待されます。

現在、信楽窯業技術試験場では、伝統や文化の再認識につながる「コトづくり支援」にも積極的に取り組んでおり、庁舎でも信楽焼のストーリーや世界観を提示しています。モノ・コトづくり支援と知財が結び付いた地域の魅力の充実を、人材育成や定住促進といった「ヒトづくり支援」にもつなげていきたいですね。

（高畑さん・中島さん）

2022年（令和4年）に移転した新庁舎では、各窯元の信楽透器が展示されている

滋賀県工業技術総合センター
信楽窯業技術試験場
専門幹　中島孝さん

滋賀県工業技術総合センター
信楽窯業技術試験場
場長　高畑宏亮さん

既成概念を超える器作りに邁進する契機となった、信楽陶芸展審査委員特別賞受賞作の大皿

出願補助金利用の際にも相談させてもらっています。昨年、近畿経済産業局主催のパリのワークショップに参加した際も、特許技術と聞いて関心を抱いてもらえた様子でした。ヨーロッパの宿泊施設は水回りが暗く、「光る洗面器」と相性が良さそうなので、現在JETRO（日本貿易振興機構）の助言を受けながら、CEマーク（EU加盟国の基準適合マーク）など本格的なPRの準備を整えています。

私は「伝統工芸は革新の連続」という言葉を大切にし、弟子たちには「陶器の常識を疑え」と教えてきました。陶器の面白さは、半導体に用いられるなど伝統工芸の枠に収まらず活躍する奥の深さにあります。最先端の素材や技術などの知的財産が信楽焼の可能性を引き出して、世の中の役に立つ新製品が創り出されるとしたら、とても楽しみなことではないでしょうか。

## 最先端の技術や素材が引き出す信楽焼の新たな可能性に期待

「信楽透器」の知財利用は、滋賀県産業支援プラザや、滋賀県庁のモノづくり振興課（現：イノベーション推進課）のお世話になりました。支援プラザには、海外販路開拓や外国

**艸方窯**
所在地／滋賀県甲賀市信楽町長野925
URL／https://souhougama.com/
創業／1975年

ヤノベケンジ
「黒漆舟守祝猫」

MR漆®塗りに蒔絵を施した
燃料タンク（個人蔵）

京都市役所本庁
エレベーター扉「千年の光」

特集 2

## 漆のポテンシャルを引き出す特許技術を共同開発

# 他領域の技術を応用した精製法で高い光沢感・透明感の漆が誕生

**伝統文化や技術が息づく京都では、伝統工芸の事業者と公設試験研究機関とのコラボレーションが花を咲かせる。「アナログ的なアプローチで継承されてきた漆の技術を、知的財産として進化させる」ことを旗印にする佐藤喜代松商店に、長年のパートナーである京都市産業技術研究所と共同開発した新時代の漆について話を聞いた。**

### 産技研をパートナーにして漆の可能性を広げる研究 ——佐藤さん

当社の創業は1921年。京都の漆屋としては後発組で、常に新しい分野の開拓に挑戦してきました。父（現会長）が3代目社長を務めていた1990年代には「漆を科学する会」を立ち上げ、京都市産業技術研究所（以下、産技研）で漆産業を担当していた大藪泰さんの参加を仰ぐことができました。産技研さんと密接に連携し、基礎研究から商品開発までデータや成果を共有する体制を築けたのは、当社の大きな強みです。

その成果の一つが、産技研さんの特許を技術移転して開発した「MR漆®」。大きな桶で攪拌する従来の精製法ではなく、三本ロールミルを使用して精製することで酵素の活性低下を防ぎ、乾燥時間を短縮しました。耐候性にも優れ、季節や作業環境の制約が減って活用シーンが広がります。2003年にMR漆®で自動車を全面塗装するPRを行ったところ大きな反響があり、アパレルや家電など従来の枠を超える業界からの引き合いが相次ぎました。（佐藤さん）

ガラスに漆を塗ったサンプル。写真右が、MR漆®のさらなる進化を可能にした「薄膜旋回分散法」を用いた透明度の高い漆

㈱佐藤喜代松商店　代表取締役
**佐藤（さとう） 貴彦（たかひこ）さん**

大学では農学部で応用昆虫学を専攻。京都市産業技術研究所・大藪泰氏の薫陶を受けて漆の奥深さに魅せられる。2011年に4代目社長に就任、漆業界全体に科学的アプローチを浸透させることを目指し、データの共有や、業種の枠を超えた提携を積極的に推進。

Collaboration

地方独立行政法人　京都市産業技術研究所
Kyoto Municipal Institute of Industrial Technology and Culture

# 京都のものづくり文化の支援に特許技術や登録商標も活用

「光を愉しみ、光と遊ぶ。」というコンセプトで世に出た「ゆうはり」

京都酵母は、各酵母に「京の琴」「京の華」「京の咲」「京の珀」「京の恋」と統一的な命名をしてブランディング

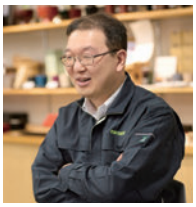
京都市産業技術研究所は、京都のものづくり文化の継承、発展のため、産業技術にまつわる研究開発支援や事業支援を行っています。伝統産業の新しい取組を、知的財産権を活用して支援した事例をご紹介します。（京都市産業技術研究所 経営企画室 主任・堀 萌さん）

## ❶「ゆうはり」（特許第6847413号）

第一工業製薬株式会社さんとの共同研究で、木材由来のバイオマス素材であるセルロースナノファイバー（CNF）をセラミックスの成形用バインダーとして活用することに成功し、特許権も取得しました。京焼・清水焼の窯元である株式会社陶葊（とうあん）さんから相談のあった「夏にも手に取ってもらえる、透け感のある陶磁器」の開発支援において、この特許の活用も提案。CNFの添加による歩留まりの大幅な向上も功を奏し、量産が可能となりました。

## ❷「京都酵母」（商標登録6372731号、6427666号など）

当研究所は昭和30年代から清酒酵母の開発・管理・分譲を続けており、世代を超えて受け継ぎ、開発してきたのが「京都酵母」です。青リンゴ風やバナナ風など日本酒に多彩な香味を与えられる酵母が現在5種類あり、京都地域限定で分譲しています。京都の蔵元で生み出される多彩な味わいの酒を京都地域の日本酒のブランドとして確立させようと、「京都酵母」のロゴマークも作成し、各酵母の名称と共に商標登録のうえ、ブランディングを推進しています。当研究所の無形資産の一つの方法論を模索し、成果を上げているプロジェクトです。



地方独立行政法人京都市産業技術研究所 産業技術支援センター 製品化・人材育成支援グループ伝統産業技術後継者育成担当課長 橘 洋一さん

## 「MR漆®」をさらに進化させ高い光沢感・透明感を生む
### ――産技研・橘さん

私は2012年に大藪から漆産業の担当を引き継ぎました。漆の価値を高める研究を佐藤社長と続ける中で生まれたのが、MR漆®を進化させた新しい漆「黎明」です。MR漆®は、漆中に含まれる水分を細かく安定分散して精製するのですが、精製にノウハウを要し、時間もかなりかかるという課題がありました。そこで、電池や化粧品、医薬品などに使用される「薄膜旋回分散法」の技術を活用して、品質を維持しつつ作業効率の向上を図ったのです。精製に成功した漆は、従来の漆に比べて高い光沢感・透明感を持つのが特徴で、京都市役所本庁舎1階のエレベーター扉（P6メイン写真）などに生かされています。ガラスやプラスチックといった透明な素材への活用にも期待しています。（産技研・橘さん）

COCOOと開発したタンブラー。佐藤喜代松商店が2014年に上市した100種の色漆がフル活用されている。

## 特許権や商標権を活用して業界の知財意識を高めたい
### ――佐藤さん

薄膜旋回分散法を用いた漆は、産技研さんとの共同出願で特許権を取得（特許第6432020号）しました。京漆器業界は知財制度への馴染みがやや薄いので、ブランディングやパートナーづくりにおいて特許権や商標権を有効活用するモデルを当社が担えればと考えています。

多様な領域への展開も重要テーマで、「漆×〇〇」というコンセプトを掲げて活動しています。特に、漆をコーティングした魔法瓶タンブラーをコラボ開発した合同会社COCOOさん（北山浩代表）は、2024年11月から当社の一角に事務所を設置するほど漆に魅了されており、一緒に大きな成果を生み出したいですね。（佐藤さん）

**株式会社佐藤喜代松商店**
所在地／京都府京都市北区平野宮西町105番地　URL／https://urusi.co.jp/
設立／1949年（創業1921年）
事業内容／漆精製卸販売、漆塗装、漆製品開発販売、漆芸教室運営
従業員数／4人

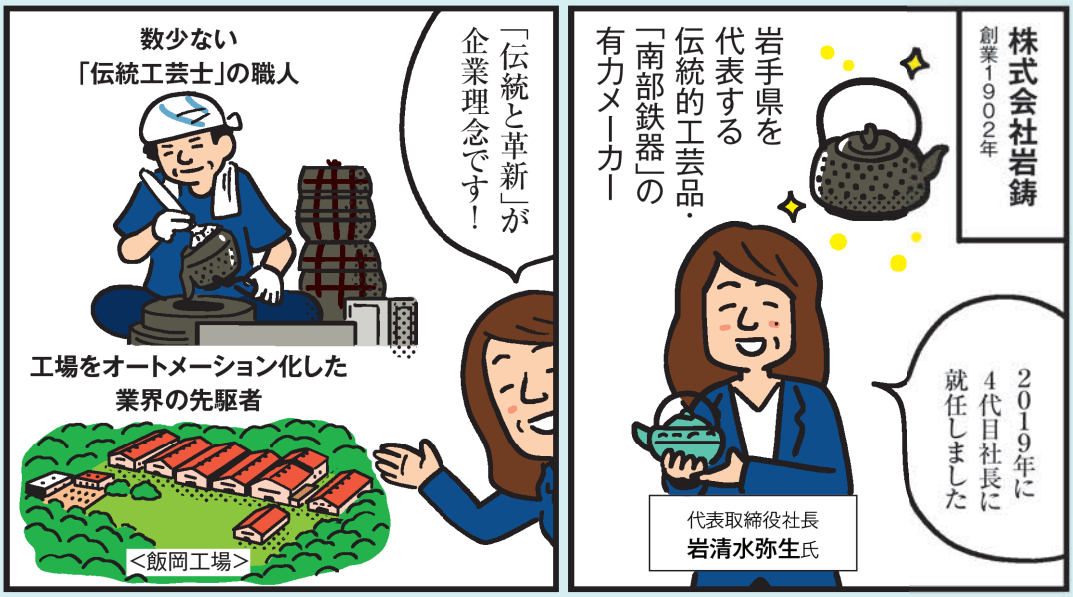

画像提供：株式会社佐藤喜代松商店、地方独立行政法人京都市産業技術研究所

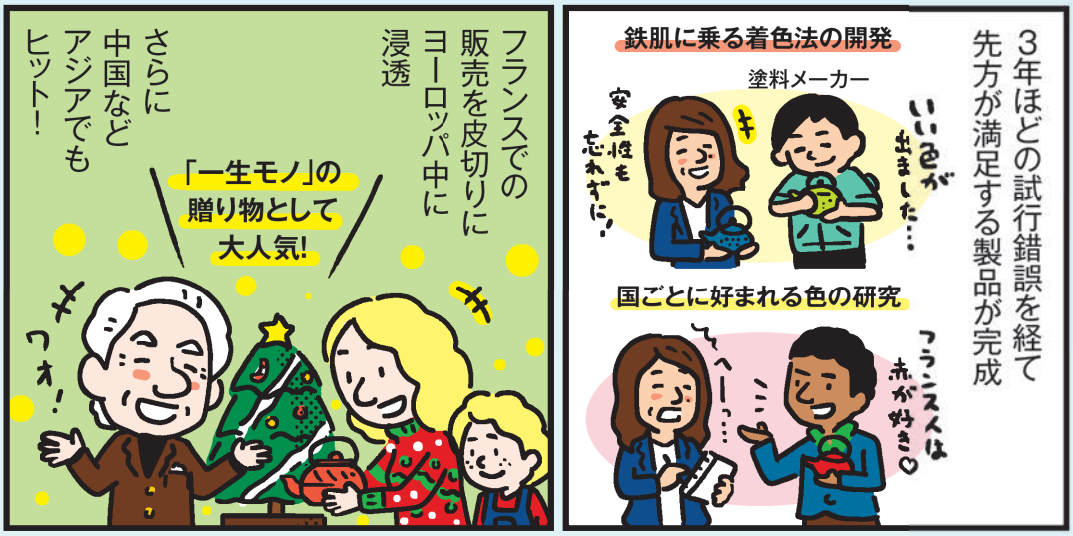
# 知財戦略

Vol. 16 ≫ 株式会社岩鋳

## どうやって取り組んでいるの？

知財戦略に積極的に取り組む企業をピックアップ。「南部鉄器」のイメージを一新する製品ラインナップで人気を博する株式会社岩鋳の、国内外のブランディングを支える知財活動をご紹介します。






INTERVIEW

**代表取締役社長 岩清水 弥生氏**

ありがたいことに、弊社をはじめ盛岡の鉄器業界では、南部鉄器に新しい可能性を感じている若い人材が切磋琢磨して、生き生きと活躍しています。一般のお客様との交流の増加も、大きな励みになっていると思います。

PROFILE

**株式会社岩鋳**

所在地／岩手県盛岡市南仙北2丁目23-9（本社）
https://iwachu.co.jp/
設立／1962年（創業1902年）
事業概要／南部鐵器工芸品の製造販売
従業員数／80人

画像提供：株式会社岩鋳

南部鉄器の国内市場はすでに成熟

カラフルな南部鉄器の開発は海外進出の大きなターニングポイントとなった

南部鉄器の未来を信じているから若い職人もとても意欲的です

あの時チャレンジしていなかったら今の岩鋳はなかったと思います

**ヨーロッパ他で浸透している「IWACHU」ブランド**

海外販路の開拓にあたりブランドを守るべく輸出先の20カ国で商標を登録

IWACHU見せてよ

岩鋳の知財戦略は現在 総務部が担当

海外への出願を一括で手続きできる「マドプロ出願」を活用しては？

それは便利！

長年にわたって弁理士事務所など専門家のアドバイスを生かして活動する

岩清水社長は商標「南部鉄器」の権利者である岩手県南部鉄器協同組合連合会を構成する組合の理事も務めている

業界の知財意識をより高めて本物の南部鉄器の良さを広めていきましょう

地域団体商標「南部鉄器」（商標登録第5102662号）

南部鉄器業界でトップクラスの製造量を誇る岩鋳はさらなる成長を目指す

年間100万点規模の生産力!

現在の売り上げは国内6割：海外4割くらいの比率です

**成長戦略①**
**海外市場に積極展開**

知財とマーケティングのノウハウで急成長中の東南アジアにも進出！

アジアでは黒い鉄瓶や鍋が人気です

**成長戦略②**
**国内市場を新たに育てる**

職人の技を間近に見られる「岩鋳鉄器館」

若い人たちの関心が高まってきてうれしいっすね

すごい！

南部鉄器の約400年の歴史では私たちはまだ新参者

ベンチャースピリットでIWACHUブランドを広げていきます！

マンガ＝柏原昇店（かしわばらしょうてん）

アイデア・出願・事業展開・海外展開 etc.

無料でアドバイス

# 知財支援はINPIT（インピット）におまかせ！

## INPIT知財総合支援窓口って？

「INPIT知財総合支援窓口」は独立行政法人工業所有権情報・研修館（INPIT）が、47都道府県に設置している地域密着型の相談窓口です。中小企業をはじめとした企業の皆さまの経営課題解決に向け、自社のアイデア、技術、デザイン、ブランドなどの“知財”の面から支援を行います。

経験豊富な支援担当者が、まずは“経営”と“知的財産”の課題を把握し、事業・知財戦略の策定助言や、それらの戦略に合った知財活動の方向性をご提案。専門性の高い課題などについては、弁理士・弁護士といった専門家やよろず支援拠点をはじめとする関係支援機関と連携し、効率的・網羅的に解決を図ります。相談は窓口での対面相談に加え、訪問、電話、メール、WEBでも受け付けています。

INPIT REPORT | VOL.16 | INPITがお手伝いした事例をご紹介

［株式会社山高建設］

## 雪国の課題を解決する特殊洗浄技術を知財に！新技術認定制度への登録も支援！

### 支援のプロセス

建設機械のリースや資材運搬などを主業として、作業現場の環境対策にも取り組んでいる新潟県長岡市の株式会社山高建設。豪雪地帯である同市発祥の「消雪パイプ」を、特殊な温水高圧洗浄でクリーニングする独自技術で注目を集めています。2018年、同社がこの技術を用いた洗浄サービスを開始するに当たり、サービス名の相談を新潟県よろず支援拠点にしたところINPIT新潟県知財総合支援窓口を紹介されたことがきっかけで、支援がスタートしました。

窓口では、消雪パイプ温水高圧洗浄技術の名称である「リバーサルクリーニング」の商標出願を支援。また、新潟県の建設分野の新技術を広く情報公開し普及と活用を促す「Made in 新潟（新技術普及・活用制度）」に申請するために、新潟県工業技術総合研究所と連携した支援を行いました。さらに、技術の権利化について専門家を活用した支援を行った結果、特許としての可能性も見いだすことができました。加えて、よろず支援拠点と連携して技術普及のための支援も行いました。

### 支援の成果

自治体へのマーケティング戦略により、消雪パイプ温水高圧洗浄技術が「Made in 新潟」の登録技術に認定。さらに特許出願および早期審査制度を活用し、早期権利化を実現しました（特許第6751961号）。また、よろず支援拠点と連携してブランド戦略を進め、積極的な広報活動を後押ししました。その結果、地元メディアに多く取り上げられたことで洗浄サービスが周知され、需要を喚起して売上げが向上しました。

**PROFILE**

**株式会社山高建設**
所在地／新潟県長岡市三島新保3211
TEL／0258-41-2500
URL／https://www.yamatakakensetsu.info/
設立年／1968年　業種／建設業
従業員数／15人

**KEYMAN'S VOICE**

**株式会社山高建設**
**代表取締役　高野 浩様より**

「Made in 新潟」の認定登録、商標権、特許権の取得、またSNSを使った広告宣伝や加盟店募集の方法などにおいて、INPIT新潟県知財総合支援窓口の支援がとても参考になりました。さらに多くの方々に活用していただける技術として発展させるために、今後も窓口を活用したいです。

**INPIT新潟県知財総合支援窓口**
**伊藤 里子様より**

消雪パイプは長岡市が発祥の地。メンテナンスも「長岡発祥」にしたいという、社長の強い思いから生まれた技術です。当該技術の活用は、地域社会に寄与する取組であると思います。さまざまな面でご支援させていただけたことを光栄に思います。

「知財ポータル」の支援事例はこちら

**INPIT知財総合支援窓口 全国共通ナビダイヤル**

TEL
0570－082100（平日 9:00 ～ 17:00）
※全国47都道府県に設置されたお近くの窓口におつなぎいたします

**INPIT知財総合支援窓口 知財ポータル**

WEB
https://chizai-portal.inpit.go.jp
>> GO TO WEB

注目のあの話題を徹底解説!

# 知財TOPICS

COORDINATOR EXPLANATION

特許や意匠、商標など知財にまつわる注目の最新ニュースを、専門家が分かりやすく解説!
今回は、北海道唯一の伝統的工芸品である「二風谷イタ」「二風谷アットゥシ」の
地域団体商標取得の背景についてご紹介します。

TOPIC

## 知財を活用したブランディング強化とプラットフォーム作りを目指す
## アイヌ文化の伝統的工芸品「二風谷(ニブタニ)イタ」「二風谷アットゥシ」が地域団体商標を取得

アイヌの伝統文化が受け継がれている二風谷(北海道沙流郡(さるぐんびらとりちょう)平取町)の代表的な工芸品「二風谷イタ」(写真左)と「二風谷アットゥシ」(写真右)が、2024年9月と11月に特許庁の地域団体商標に登録された。

二風谷イタは、浅く平たい形状の木彫りの盆。渦巻の形(モレウノカ)や棘状の形(アイウシノカ)、目のような形(シクノカ)などの組み合わせからアイヌ様式に特有の美しい文様が形作られる。また、文様の隙間を埋めるように「ラムラムノカ」というウロコ彫りが施されているところも特徴。

沙流川流域に古くから伝わる二風谷アットゥシは、オヒョウなどの樹皮の内皮から作った糸を用いて機織りされた反物で、着物や半纏、前掛け・帯や小物類などに使用される。水に強く通気性に優れ、天然繊維としては類を見ない強靭さと独特の風合いが主な特徴。高度経済成長期の1960～70年代には、土産品として地域の観光産業の隆盛を支えた。

QUESTION ▶ ここが知りたい!

### 地域団体商標とは?
### 取得を目指した背景は?

アイヌ工芸の技術や伝統を守ることを目的に、二風谷民芸組合は「二風谷イタ」「二風谷アットゥシ」について経済産業大臣に伝統的工芸品※の指定申出を行い、2013年3月に北海道で初めて伝統的工芸品の指定を受けている。今回新たに取得した地域団体商標は、「地域名」と「商品(サービス)名」からなる地域ブランドの名称を保護することにより、地域経済の活性化を図ることを目的として、2006年4月に導入された制度。

※伝統的工芸品:「主として日常生活の用に供される」「伝統的な技術又は技法により製造される」など5項目の定義を満たし、「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」に基づき経済産業大臣の指定を受けた工芸品。2024年10月17日時点で243品目が対象となっている

ANSWER
私が解説します!

平取町アイヌ工芸伝承館
ウレシパ 施設長
新井(あらい) 貞則(さだのり)氏

1975年横浜生まれ。1998年に夫婦で平取町に移住し、平取町新規就農者第一号として花卉栽培農家を約20年間経営。その後、観光協会でDMO(観光地域づくり法人)を3年間担当し、2021年から現職。

## 国が認める「地域団体商標」取得によって他産地と差別化し、ブランド価値を向上。アイヌ文化への注目が高まっている状況を継続的なものにしていく取組が重要

**【地域団体商標取得の背景】**

「平取町アイヌ総合政策推進基本計画」に基づき、現在5つの主要プロジェクトが実施されています。その1つ「アイヌ文化のブランド化推進事業」を進める中で、伝統的工芸品に関する権利の確保がブランド価値向上において重要だという思いを強めました。実際に地元の方から「空港の土産品売場で、他産地のイタが二風谷イタとして販売されている」と情報が寄せられたこともあります。そこで平取町・二風谷民芸組合・一般社団法人びらとりウレシパで連携し、地域団体商標取得という具体的な成果で他産地との差別化を明確にすることを目指しました。これにより、工芸家の方々の権利保護や意識醸成につながっていくことも期待しています。

**【商標取得のプロセス】**

企業組合ではなく任意団体である二風谷民芸組合は、地域団体商標の出願要件を満たせなかったため、コンサルティング会社のアドバイスも参考にして、地域未来投資促進法※の特例措置を活用することにしました。申請者となった一般社団法人びらとりウレシパは、「アイヌ工芸品の生産性の向上及びアイヌ伝統工芸の継承と担い手の育成」を事業目的として活動し、二風谷民芸組合員が理事の半分以上を占める団体です。なお、特例措置は2027年3月に切れるので、権利移管の手続きが今後必要になり、INPITさんの支援も受けながら対応を進めていく予定です。

**【今後の展開のイメージ】**

地域団体商標取得という情報を積極的に発信し、ブランド力を高めていきたいと考えています。ネット販売とともに、2年前から取り組んでいるふるさと納税返礼品も重要な販路として成長中ですが、ここでも地域団体商標のマークを活用していく方針です。本件を含めて平取町は地域団体商標を4つ登録しており、北海道内の町では最多です。そのため、知財をどのように管理・運用していくかという基準の設定やプラットフォーム整備に地域で取り組むことが大切であり、今回はその第一歩だと考えています。大ヒット作品『ゴールデンカムイ』の影響などで、アイヌ文化への関心が高まっている追い風の状況を実感していますが、平取町で取り組む「二風谷アイヌクラフト」プロジェクトや、経済産業省「伝統的工芸品産業支援事業」の継続活用などで、一過性のブームにとどまらないように努めていきたいですね。アイヌの歴史の雄大な流れと、ビジネスやカルチャーの潮流に的確に対応するスピード感。2つの時間軸を大切に活動していきます。

※地域未来投資促進法:地域の特性を生かした付加価値を創出し、地域経済の活性化につながる「地域経済牽引事業」の促進を目的に2017年7月に施行。地域の事業者は、市町村・都道府県が作成した「基本計画」に基づき「地域経済牽引事業計画」を作成し、都道府県知事の承認を受けることで、地域未来投資促進法に基づく国・地方公共団体の支援策や優遇措置を活用できる


画像提供:二風谷アイヌクラフト事務局

# イラストレーター パパンがゆく!

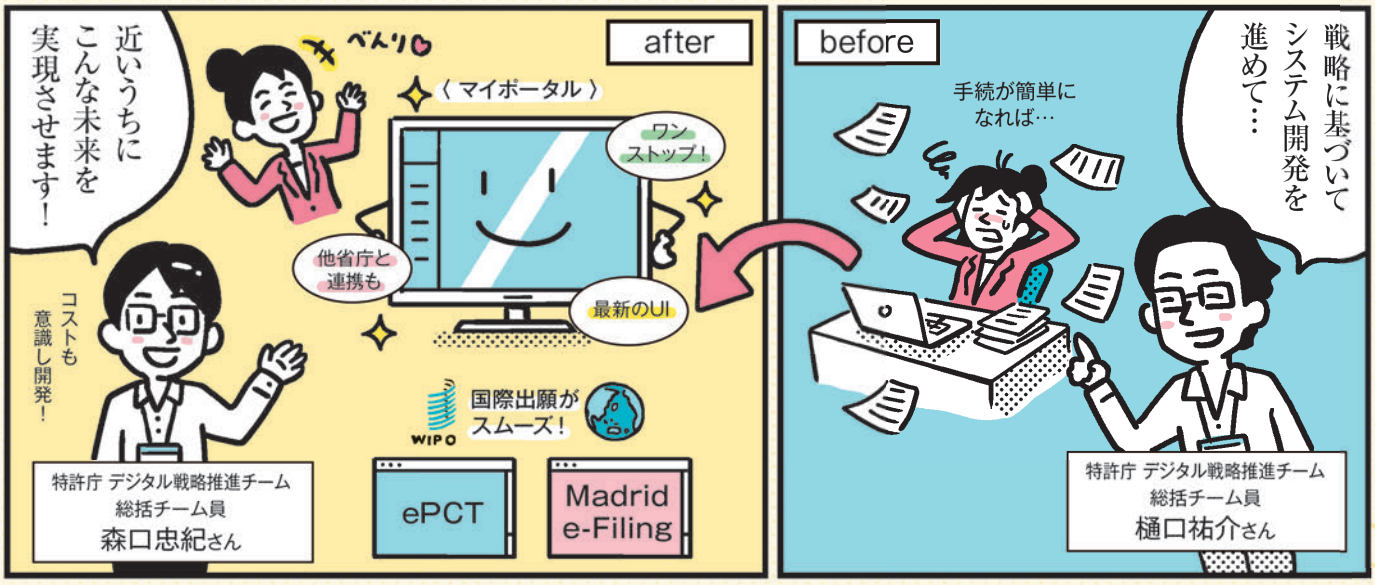
マンガでわかる知財!

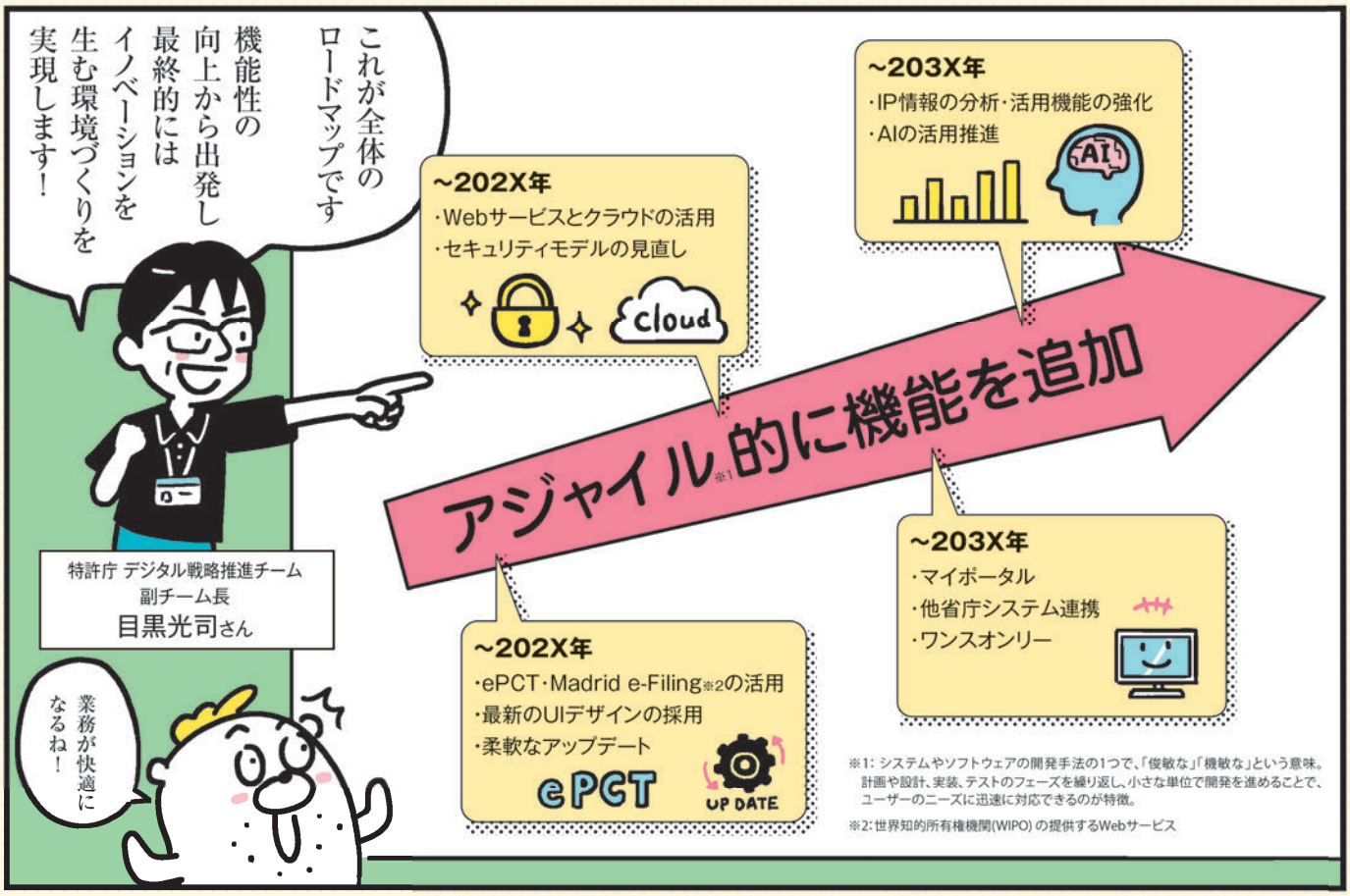
イラストレーター
柏原(かしわばら) 昇店(しょうてん)さん

コミカルなタッチが特徴で、マンガも描けるイラストレーターとして広告・書籍・blogなどで活躍中。自身をクマのキャラ「パパン」に見立てて、難しい物事をわかりやすく伝えるのが得意。
X（旧 Twitter）：@kbst2


## 「特許庁デジタル戦略202Xって？」

特許庁は2024年11月に特許庁デジタル戦略202Xを発表しました。
その取組が実現に導く便利で快適な未来図について、パパンが取材しました！



Check 詳細はこちらから 「特許庁デジタル戦略202X」について／特許庁HP

# ［特許庁からのお知らせ］

## 目指せ「リケジョ」！

## 1 女子中高生と保護者、教員が対象のキャリアデザインセミナーを開催

特許庁・INPIT 共催で、女子中高生やその保護者、教員を対象としたキャリアデザインセミナーを開催します。イベントタイトルは「女子中高生キャリアデザインセミナー：私のアイデア、未来のチカラ。」です。第一線で活躍するリケジョ（理系女子）トークセッションなどを通じて、理系進学で広がる未来のキャリアについてお届けします。

日時　2025年3月26日（水）14時～17時
会場　グラングリーン大阪 北館 JAM BASE（ジャムベース）
※オンラインでも開催

≪ 申込はこちらから
キャリアデザインセミナー申込フォーム／INPIT

## 小学生から大学生までの学生が参加する

## 2 「第2回 Show and Tell プレゼンテーションコンテスト」が開催

2025年１月17日、WIPO日本事務所が「第2回Show and Tell プレゼンテーションコンテスト」を開催しました。第1回コンテストと同様、小学生から大学生までの学生（計20人）がイノベーションやクリエーションについてプレゼンテーションを実施。「イノベーション・クリエーションの素晴らしさを、あなたの言葉で」をテーマに、“Show and Tell方式”で家族や知人を思う気持ちから生まれた発明や、起業の経験、SDGsへの貢献などを披露しました。幅広い分野から招かれた審査員（特許庁からは広報室長・富士春奈が出席）が審査し、金賞・銀賞に加え、オンライン配信の視聴者投票による一般審査員賞を選出。合計8人の受賞者が決定しました。後日、WIPO日本事務所ホームページにて発表会の様子をまとめたアーカイブ動画を公開予定です。

**Question**

**「世界知的所有権機関（WIPO）」とは？**
多国間における知的財産に関する諸条約の管理や、国際出願・登録制度の運用、知的財産に関する制度策定、知的財産分野での途上国支援などを行う、国際連合の専門機関。

**「Show and Tell」とは？**
初等・中等教育における、コミュニケーション能力の向上を目的とした国際的な教育手法。自分にとって大事なモノなどを大勢の前で発表し伝えることで、発表する力や、チームワーク、聞く力を養うことができる。

≪ 詳細はこちらから
WIPO日本事務所が「第2回Show and Tell プレゼンテーションコンテスト」を開催／WIPO日本事務所

**《コンテストの結果》**

〈小学生の部〉
**金賞　佐々木 大河**
「難病の母とずっと手を握りたい僕の挑戦」
**銀賞　中嶋 みなみ**
「心と体の状態を家族で共有するアプリ『心＆体メーター』」
**一般審査員賞　戸島 瑛翔**
「カラメル嫌いでプリンが苦手な小学生が作った理科の実験を思い出す『ビーカープリン』」

〈中学生の部〉
**金賞　嘉手納 杏果**
「発明で切り拓く次の社会への扉」
**銀賞　水野 舞**
「マイヤリングの発明体験に基づくi育活動～世界に届け！子どものidea～」

〈高校・大学生の部〉
**金賞　大山 颯真**
「Dayne～ディスレクシアを持つ子供に向けた漢字学習支援ツール～」
**銀賞　岡部 真央**　「炭素で繋ぐ命の糸」
**柴田 愛乃助**　「ヘルスアップアプリ」

知財が創る未来

# ふくしま イノベーション 企業ファイル

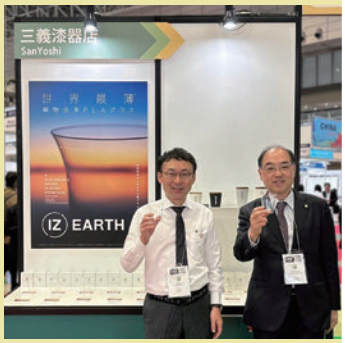
2024年1月、特許庁は福島県及び公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構と、知的財産の保護及び活用に関する連携協定を締結しました。知財で福島の新しい時代を切り開く企業やプロジェクトを紹介します。

FILE #04

## 株式会社三義漆器店

代表取締役／曽根佳弘
住所／福島県会津若松市門田町大字一ノ堰字土手外1998-3
従業員数／86人（2025年1月現在）
URL／https://www.owanya.com/

## 時代が求める「器」を探究して
## 知財の力で新しい価値創造を続ける



曽根社長（左）と小松技術士事務所の小松所長（右）。脱プラスチック容器「IZ EARTH」は菓子容器（下）や飲料カップなどへの展開が可能。環境省の補助金を活用して工場も完成し、本格的な展開が始まっている

福島県の伝統的工芸品・会津漆器の塗師だった初代の創業から今年で90年目を迎える株式会社三義漆器店。三代目の曽根佳弘社長は、「日用品のお椀に特化して個性を打ち出し、現在に至るまで、日本初の食洗機対応の漆器や電子レンジで使える飽和ポリエステル（PET）樹脂製漆器など、ライフスタイルの変化に対応した製品開発に取り組み続けています」と、会社の特徴を語ります。

社内には部門を横断する知財活動の委員会を設置。外部の専門家のアドバイスも活用しながら、新製品開発時の特許権や意匠権の取得、ライセンス契約の締結などを行っています。

「最近では、福島県が実施している〈御用聞き訪問〉で、当時東北大学大学院で教授をされていた堀切川一男先生から、摩擦力学に基づいたアイデアを指南いただき、それを参考に樹脂製のパスタ専用フォークを開発しました。同行の知財専門家の方々から特許取得のアドバイスも頂き、新しい知財が生まれる現場に立ち会えたことに感動しました」

開発されたパスタ専用フォークは、大手量販店などで採用。特許取得の効果も再認識したそうです。

「独自技術を保護することで職人や社員を守れますし、価格競争も避けられます。さらに、取引相手としてご指名いただくなど、競争力の向上にもつながりました」

福島県出身で国際的に300超の特許を保有する小松技術士事務所（いわき市）の小松道男所長との提携も、特筆すべき成果。

「地球の環境危機に関する小松先生のセミナーを拝聴して強い印象を受け、植物由来で自然に還る生分解性プラスチックの射出成形技術に大きな可能性を感じました。当社の設備を活用して量産化ができると直観し、小松先生に熱心にアプローチして特許技術のライセンス契約を締結しました」

ライセンスされた技術を活用して、土に還る器の「紫翠盃（しすいはい）」を開発、販売。先端技術と伝統の会津塗を組み合わせたコンセプトや完成度が高く評価され、2020年ドバイ国際博覧会で日本パビリオンのVIP来場者の記念品などに採用されました。さらに、ポリ乳酸（PLA）の射出成形による薄肉プラスチックカップとして世界最薄の0.53㎜のコップ製造にも成功。会津から地球の環境問題に取り組むメッセージを込め、新ブランド「IZ EARTH（アイヅアース）」を立ち上げました。

「会津漆器は伝統産業と呼ばれますが、その歴史が始まった約430年前は最先端産業であり、多くの職人が創意工夫していたはずです。当社は会津塗の伝統をリスペクトしつつ、個々の工程を深掘りしたり、他分野の技術を組み合わせたりして得られる多様なアイデアを、イノベーションの源泉として大切にしています」

左がパスタ専用フォーク（特許第6232173号）。二股になった先端の内側がえぐれた構造で、麺の摩擦が加わることで絡みやすくなる。右が「紫翠盃」。山の木々の美しい様子を表す「紫幹翠葉」からネーミング

### POINT

### 固定観念を持たず、時代のニーズに耳を傾けて製品を開発

当社は、その時代の生活者がお椀に望む機能やかたちを常に追求してきました。それが、綺麗なお椀の持ち方が自然に身に付く「しつけ椀」（写真）や、美しい木肌を求めるニーズに応えた「メープルシリーズ」（2012年度グッドデザイン賞）です。米国市場進出の際は、安価な競合製品と差別化するため、「塗り」の高付加価値化が求められました。東日本大震災の時、避難所では水が不足して食器の洗浄が課題となった経験を参考に、少量の水でも洗える撥水機能を持った漆器を構想。大手塗料メーカーとの共同開発で3年間の試行錯誤の末、撥水コートで汚れや油を弾く合成漆器「ラクピカ」の開発に成功し、現在では主力商品の一つです。（曽根さん）

画像提供：株式会社三義漆器店

とっきょ Vol.64

発行：2025年3月7日　制作：特許庁広報室
［お問い合わせ先］03-3501-6792
（特許庁広報室直通 平日9:00～17:30）
［E-Mailアドレス］ PA0270@jpo.go.jp

WEB版もチェック!
※バックナンバーもご覧になれます


**特許庁の広報誌「とっきょ」に関するアンケートにご協力ください**

アンケートにご協力いただいた方には、次号広報誌（vol.65）を送付いたします。

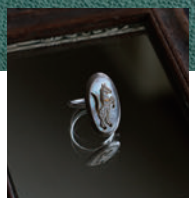
「とっきょ」アンケート

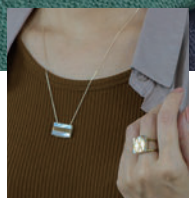

※本冊子は、グリーン購入法に基づく判断基準を満たす紙を使用しており、「Aランク」のみを用いているため、「紙へのリサイクル可」

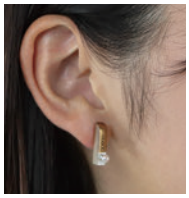
IP SELECTION

# こころと体にうれしい 知財セレクション

社会で日々生まれる問題やニーズの解決には、実は多くの知財が貢献しています。私たちの未来を切り開くグッドアイデアをセレクトしました。







今回の知財 | VOL.16

## 蒔絵（まきえ）・螺鈿（らでん）の装飾を施した 現代の着こなしに合うアクセサリー

Classic Ko＼香（商標第5836689号） Classic Ko（商標第6328530号）

PROFILE

**漆工芸大下香仙株式会社**

所在地／石川県加賀市二子塚町103-2
URL／http://www.classic-ko.jp
創業／1894年（2022年法人化）
業種／製造業
従業員数／４人（2025年1月末）

[COMPANY]

漆工芸大下香仙株式会社

[PRODUCT]

蒔絵・螺鈿細工のアクセサリー

「Classic Ko」

初代・大下雪香による創業以来、約130年にわたり加賀蒔絵を作り伝える漆工芸大下香仙工房のアクセサリーブランド。蒔絵・螺鈿などの伝統技法で表現された、現代的ながらも、クラシカルな気品漂う東洋と西洋が混在したモチーフが特徴。イヤリング、ネックレス、指輪、ブローチなどを手掛ける。

### 伝統技法をアクセサリーに 5代目蒔絵師の挑戦

古くは奈良時代から用いられている、日本独自の装飾技法・蒔絵。漆で模様を描いた漆器などの表面に金銀錫粉を蒔きつけて付着させる技法が特徴です。食器や家具をはじめ、美術工芸品に用いられることが多いですが、今回紹介するのは、この蒔絵や螺鈿といった伝統技法を現代のアクセサリーに施した「Ｃｌａｓｓｉｃ Ｋｏ」というブランド。１８９４（明治27）年の創業以来、石川県加賀市で代々蒔絵を作り伝える漆工芸大下香仙工房が手掛けています。

花鳥風月に代表されるような日本の伝統模様とは異なる、東洋と西洋が混在した独創的なモチーフをあしらったデザインが特徴。

「先代の頃までは、茶器や棗（なつめ）といった茶道具への装飾を主な生業としていました。しかし、時代の移り変わりとともに茶道具の売れ行きが落ちてきたため、ブランドを作り製造・販売まで一貫して行うことで新たな可能性を探りました」と語るのは、現代表の5代目大下香征（正之）さん。

アクセサリー作りは工房初の試み。試行錯誤の連続だったそうです。

「金具加工専門の工房の方と試作を繰り返しながら、手探りで使用感のいいアクセサリーの制作を進めていきました。当初は百貨店で販売しても、お客様の『蒔絵』のイメージが古色蒼然たるもので、関心を持つ人がいてもなかなか購入に至らなかった。そこで、現代の着こなしに合わせて相性のいい柄や色味を取り入れていくようになりました」

ブランド名は「古典的、一流、時代に左右されない」などの意味を持つＣｌａｓｓｉｃに、雅号の「Ｋｏ」を合わせたもの。当初考えていた名称が他社と重複していたため、Ｊ-ＰｌａｔＰａｔなど知財検索サービスを使い詳細な調査を行ったうえで、今の名称に落ち着きました。知財の重要性を実感した香征さんは、石川県産業創出支援機構やＩＮＰＩＴ石川県知財総合支援窓口の助言も受け、２０１６年に商標権を取得。中国への展開を見据え、21年には中国でも商標登録をしています。

国内に加えて海外のお客様からの購入も多いＣｌａｓｓｉｃ Ｋｏ。

「もちろん伝統的な日本の意匠を好む外国の方もいますが、『今の日本人がいいと思うもの』を欲しいという方が多い。そうした層に響いていると実感しています」と香征さんは手応えを語ります。

「伝統工芸的なものを好むコアな人だけでなく、幅広い人に響く作品を作り、届けることが大切。そういう意味ではワークショップなどで蒔絵の魅力を知ってもらうことも大事だと考えています。今後は制作・販売にとどまらない多角的なアプローチで、関わりのある人（交流人口）を増やす試みを続けていきたいです」

画像提供：漆工芸大下香仙株式会社